

「僕たちに何ができるか」

(254号 1997. 9)

● 2回目の座談会は夏休みに入ってすぐの23日、再び天山閣にて行った。出席者は異口同音に「長い話し合いだった」「こういう話が職場でできるとよいね」と言って帰途についたのだが……、録音テープが空回りだったのだ！結局、出席された皆さんに一言ずつ書いて送って頂きました。座談会らしくまとめることは出来ませんでしたか、ご容赦を。

発言1 Y a

2回目の座談会、録音用ウォークマンをもって、少し遅刻して天山閣へ行きました。それで、スイッチONでとっても充実したいい話になっていきました。終わった後、2学期からは、なんだか子どもたちのいい顔が見られそうな気がしてうれしくて、さわやかでやさしい気持ちになれました。が、しかし、ウォークマンがうまく動かず、せっかくのいい話が再生できなくなり、残念で残念で……。

どんな話しだったか思いおこすと、頭がパニック。一番覚えているのが、食い気に走って焼魚の身を必死にとっている間に他の4人の先生たちでどんどん話が進んでいって、教師はスペシャリストとして目の前にいるたくさん子どもたちに対応できるように“専門性”をもっともっと磨いていかないといけない、っていう話になっていました。「最後は子どもへの愛情だね」という言葉もとても印象的でした。これから私はいろいろな教材を子どもたちに紹介しながら、それを十分に味わわせられるようにポイントをしばり（この辺が専門性といわれるところかなと思っていますが）、私が思うところへひっぱりこむんじゃなくて、子どもたちとともに追求していく仕事をしていかないといけないな、していきたいな（ちょつとしんどいけど…）と思いました。その結果子どもたちが自分もまんざらじゃないなんて少し感動でできることを期待して。

発言2 K u

2回目の座談会はとても充実した話し合いで、よーしががんばるぞと元気が出るものでした。その感動をみなさんにもぜひ伝えたいのですが、のみながら食べながらで、今となるとあまり覚えていません。むりやり、おい出してみます。私は、同じ学校でやっぱり同志会員のN先生から、こんな話をきいていました。「視点・論点のシリーズ読んでるで！（うれしい） 去年の6年があれたのはうちだけやない。それで自分なりに分析してみた。あの子らは保育所で“自由保育”がはじまった年の子らや。だから、みんなで一つのことにむかって取り組んでいく力に欠けている。それぞれが好きなことをやっていたらOKだった。しかも、“生活科”がはじまったのもこの子らからだった。一年目で、現場もどうしていいかわからなかった頃だった。だから、こうなったのだと思う。結局、文部省の指導要領が諸悪の原因……。」（そうか、そうだったのか。）……と思って座談会でもそれを伝えました。やっぱり学校は、みんなで一つのこと（文化的価値のあるもの）に向かって、学びあい、つくりあげていくべきところなんだ!!とみんなの話をささながら思いました。とくに学校生活には「リズムがあるべき」という話がわかりやすかったです。一日の中でも、ぐっと集中する時間とちょつとほっとする時間があり、長期的にもそんな流れがある。そんな流れを我々教師がつくっていったらあかんねんなあ、と思いました。（この話、全国大会開会講演で梅原氏も似たようなことおっしゃっていました）

Y aさんが、子どもたちに「2年間学んだ中で一番心にのこったことをたずねると、体育で実践したこと

ばかり返ってきたそうです。教師がしっかり学んで、ここは…と勝負したことは、子どもも熱中するのですね。日頃、職場にはいろんな教師がおり、中には樂することしかできない人もいるし、前むきにやろうとする人の足をひっぱる人もいるし、保護者だっていろいろだし、子どもだって心のうちではがんばりたいって思っても、表面上はそっぽむいている子もいる。迷ったり、悩んだりすることも多い日々です。でも！！でも！！やっぱり私たち教師は、しっかり学び、子どもたちに見通しをもたせ、共にできてわかった尊びを味わわせなくちゃいけないなあと、まあ、あたりまえのようかもしれないけど、再確認し、安心し、また、元気がでた座談会でした。

発言3 N a

学級の子どもと対立したことはあるが、学級が荒れたことは経験していない。こんな私に語る資格はないと思うが……。もし自分のクラスが荒れたらどうするだろう。学級は突然あれるものなのだろうか。やはり予震があるのではなかろうか。アブナイと感じたときに、その中心になっている子どもと、正面からぶつかるしかないだろう。逃げないで、愛情をもって、その子の心とぶつかりたい。私にできることは、それくらいだろう。最近、教師の多忙が話題になり、「無能な教師がいてもいいじゃないか」なんていわれる。教師が時間的精神的ゆとりを持つことは大切だと思う。しかしその事と同じくらい専門的力量をつけることは大事だと思っている。専門的力量を高めることは、ゆとりを生むものだとは常々考えている。あれもこれも教えなければという目の前のことにふりまわされなくてすむし、父母や同僚に対してもフラフラしなくなるからだ。アブナイと感じるアンテナを磨くこと、共感できる仲間とともに磨けたら、それが何より一番だ!!

発言4 O o

座談会は本当に中身のこいものだった。小学校高学年が荒れるなんて信じられなかった。はじめは「その先生いったい何してきたんだ」というようなとらえ方をしていた。しかし、その事実が全国に広がっていることを知るにおよんで、ことは個別教師の対応の問題じゃないと思えるようになってきた。(もちろん、それが引きがねになっていることはまちがいないだろうが……。)若い、経験の不足している先生の学級だけが荒れているのではなく、ベテランと呼ばれる先生の学級も荒れているという現実には初めはショックを受けた。でも、冷静に考えてみると、経験年数の多さとよい先生であることは、いつも等式関係にあるとは限らない。その逆の場合だってあるだろう。ベテランになれば、誰しも自分のスタイルを持っている。この自信が過信になっていないか。自らのスタイルにのってくる子は、やりやすい良い子で、のってこない子は、やりにくい悪い子ととらえていないだろうか。自らの実践スタイルに子どもを合わせるのではなく、子どもの現実を謙虚に受けとめるべきだろう。僕らこそ、柔軟であらねばならないし、現象化してくる事実にうろたえることなく、本質を見抜く目を育てていかなければならない。そう考えさせられた座談会だった。

発言5 M i

突然辞める先生がいる、人を育てる教育の場が心を傷つける場になっているのではないかと。子どもや親達も変わってしまったのか。こういう問題意識から出発してきたと思いますが、結論は……子どもは賢く大きくなりたがっているし、教師もいい仕事がしたいと思っているということではないでしょうか。明るい笑顔あふれる学校の為にこの座談会のように職場でもわきたつように話し合いや学習をしたいです。(終)